

大学院における臨床心理士育成に関する一考察 — 大学院生、修了生のアンケート調査をもとに —

A study of trainings for clinical psychologist on graduate school — Based on questionnaires for graduate students and post-master's course —

青木 佐奈枝

(東京成徳大学)

Sanae AOKI

(Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究では、臨床心理士育成のためのより効果的な大学院教育プログラムを形成する試みの一つとして、教育を受ける側の視点から、必要とされる教育・研修を捉えることを目的とした。臨床心理士を目指す大学院生、及び修了後1～2年の修了生に対する質問紙調査をもとに、彼らの問題意識および必要とする教育・研修を調査し、比較検討した。

その結果、大学院生においても修了生においても大学院教育で最も役に立つと答えたのは実習や実践に即した内容の講義であった。しかし、大学修了後の方が、講義についても価値を置いていることが示された。また、大学院生から修了生になるに従い、悩みの質もその対処の方法もより明確で具体的になって行く傾向が明らかになった。ただし、問題意識が明確となり、勉強したいという意識が高まった時期には欲する支援を得るのが時間的にも経済的にも困難になる傾向は窺われた。

キーワード：臨床心理士、大学院生、教育研修

I. 問題と目的

臨床心理士有資格者は増大の一途を辿っており、2007年3月時点での有資格者数は16000人以上である。1997年の阪神淡路大地震やオウム真理教による地下鉄サリン事件、そして、神戸児童殺傷事件以降、「心のケア」に対する社会的関心が高まったこともあり、臨床心理士有資格者の数はこの10年で急増した。臨床心理士を養成する指定校大学院の数も全国で150校を超え、今後ますます臨床心理士の増加が予測される。

このような状況の中で、近年、浮上した問題の一つに臨床心理士の質の確保がある。増大する臨床心理士数—すなわち、量に対して質をいかに維持し、向上させるか—という問題である。これは「一定の技量を持った臨床心理士をどのように育てるか(藤原, 2003)」という臨床心理士養成の問題にも繋がる。というのも、この10余年、臨床心理士志願者の増大により、指導者数に比して指導される側の数が圧倒的に増え、以前の教育指導体制では十分な教育が行き届かない事態が生じている。「現場で実務家の傍らに新人が付き、仕事

を手伝いながら覚えていく」「新人が見よう見まねで先輩の技をぬすんでいく」という旧来の個人的な指導・教育は難しくなり（神田橋, 1997）、臨床心理士の養成方法が大きく変化してきた。特に大きな変化が生じたのは臨床心理士養成を担う臨床心理士指定校大学院である。大学院における講義の体系化、臨床実習指導の充実など、臨床心理士養成のための教育体制が見直されてきた。日本臨床心理士資格認定協会の指針を基に、大学院ごとに様々な試みがなされているが、全体としては効果的な教育や実習の有様を模索している時期とってよい。

現状の打開策の一つとして、臨床心理士養成大学院の教育カリキュラムに関する研究や報告も徐々に増加してきた。これらの研究は、内容によっていくつかに分類される。比較的多く見られるのは①臨床心理士養成大学院の役割やその教育体制について現状を踏まえ見解を述べたもの—大学院における問題と今後の展望など、よりマクロな視点から述べたものである（畠瀬ら, 1999；藤原, 2002；2003；松田ら, 2006）。そして、②臨床心理士育成のための試みについて述べたもの—大学院における教育プログラムの実施とその効果検証に関するものも比較的多い（葛西, 2000；金沢, 2002；松原, 2004；唐沢, 2005；山田, 2007；井上, 2008）。また、数は少ないが③大学院生や修了生に対する実態調査をもとにした報告（深津ら, 2001；田畑, 2006a, 2006b）も認められる。

これらの報告を概観して推測されることは現在の教育研修に関する研究には若干偏りがあり、未着手の領域があるということである。すなわち、現在までの研究は以下の特徴を含む。(a)教育を行なう立場—大学院側の視点から必要とされる教育が述べられているものが多く、教育を受ける立場—学生や修了生側の視点を調査し、必要とされる教育や研修が述べられているものは少ないということ、また、(b)教育を受ける側を対象とした調査においても、実態調査・現状把握に終始し

たものが多く、教育を受ける側の意識—すなわち臨床心理士になる上で何を悩み、何を必要としているか—や大学院教育に対する評価にまで言及したものは少ないこと、さらに、(c)修了後の新人臨床心理士に関する報告は極めて少ないことである。

しかし、実際に今後の質を重視した臨床心理士育成を考えると、教育を受ける側からの、更には教育を受けて実際に現場で働く者からの視点は、教育する側からの視点と同様に重視する必要がある。また、修了後、現場に出たときにどのように大学院教育が活きているのか、大学院ユーザーである修了生（現職の臨床心理士）の評価も大学院教育を考える上では必要な視点であろう。

そこで、本研究では、臨床心理士育成のためのより効果的な教育プログラムを形成する試みの一つとして、大学院教育を受ける側の視点から、必要とされる臨床心理士養成教育について考えてみたい。この際、臨床心理士候補生である大学院生および新人臨床心理士の大学院教育に対する評価についても尋ねた。また、大学院生から修了後の臨床心理士まで、変わり行くニーズを考えていくことも本研究の目的とした。

II. 方法

1. 対象

関東近郊のA大学大学院心理学研究科修士課程1年生12名、2年生13名（以下、MC・M1・M2）および、同大学院修了後1～2年の修了生17名（以下、PM）。対象者の詳細はTable 1の通り。

Table 1 対象者の内訳

	M 1	M 2	PM
人数 (男:女)	12 (2:10)	13 (2:11)	17 (2:15)
平均年齢	26.4	30.4	31.9
臨床心理士有資格者	0	0	17

2. 方法

2007年3月に質問紙調査を施行。

3. 質問内容

質問紙は主に以下の内容で構成されており、無記名で実施した。①フェイスシート、②現在の悩み、③大学院教育への評価・希望、④修了後研修の実状・希望などである。

Ⅲ. 結果

1. 現在の悩み・困っていること

現在の悩みや困っていることについて、自由記述で回答を収集した結果を Table 2 に示した。MC、PM のどちらにおいても最も多かったのが、臨床心理業務を行う上での「力量不足」であった。しかし、具体的な記述を見ると「力量不足」の内容は異なる。すなわち、MC が「全体的に力が不足している」「知識とか技術が足りない」と答えており、何が不足しているかについては漠然としているのに対して、PM は「発達障害に対する知識が不足している。特にアスペルガーに対してもっと勉強できる機会がほしい」「心理査定、特にロールシャッハ・テストを解釈することが十分にできない。勉強会が見つからないのが悩み」など、不足点が「具体的」であるものがほとんどで、漠然

Table 2 現在困っていること・悩み

	M1	M2	PM
自分の性格・適性	3		
就職・将来	8	4	
漠然と不安	2	2	
力量不足	7	5	6
仕事・業務上の悩み			5
一人職場の苦労 (心理職の理解)			3
仕事のマネジメント (複数職場の掛け持ち)			3
人間関係			1

と「力不足」という回答は皆無であった。また、何が不足しており、どうしたらよいかに言及しているなど、「力量不足」に対しての「対処行動を念頭に入れている」回答が多かった。

また、MC に認められ PM では認められなかったものに「自分に関する悩み」「就職に関する懸念」「漠然とした不安感」がある。「自分に関する悩み」は特に MC 1 に認められたもので「自分の性格を直したい」「もっと積極的に人と関われるようになりたい」「打たれ強くなりたい」など自分の性格に関する悩みや、「今の自分で専門家になれるかどうか不安」「こんな自分でも心理臨床家になれるのだろうか」など心理臨床家としての「適性に関する悩み」が多かった。この種の悩みは MC 2 では減少し、PM では全く認められなかった。

また、反対に PM に多かった悩みは「仕事上の悩み」であり、臨床心理士として、各現場でどう機能すべきかに関するものが多かった。また、PM の悩みについてはこの他にも「一人職場の苦労」「仕事のマネジメント」など日々の業務に関するものが圧倒的に多かった。

2. 大学院教育について

1) 大学院教育で役に立ったこと

大学院教育の中で最も役に立ったと思うことについて回答を求めたところ、実習実施後の M 2・PM において最も多かったものは「内部及び外部実習」であった。これは PM の半数以上が挙げている。次いで「講義」であったが、特に、ミニ・カウンセリングや心理査定実習など、実習を用いた、より実践に即した講義内容を挙げた者が多かった (Table 3 参照)。

また、最も役に立ったとされる実習のうち「内部実習」について、その理由を M 2 に尋ねたところ、最も多かったのが「継続面接ケースを早くから担当できたこと」で約 40% の学生が挙げていた。次いで「スーパービジョンを受けられたこと」

「受付実習」(25%)であった (Table 4 参照)。

2) 大学院時代にやればよかったこと

また、大学院時代にもっとやっておけばよかったこと (MC 1 についてはこの1年間でもっとやっておけばよかったと思うこと) について回答を求めたところ、MC、PM とも「知識を身につける」が最も多かった。PM ではおよそ80%がこれを挙げている (Table 5 参照)。

ただし、身につけたい知識についても MC と PM で若干の差が認められた。MC が「知識全般」「見立ての力」と漠然と答えているのに対して、PM ではそのような回答はなく、より具体的であった。PM での回答は、知識にしても「精神医学的な知識。特に発達障害に関する知識」、また、査定に関しても「小児精神科における査定」「ロールシャッハ・テストの解釈」「インテイクにおいて見通しがつく力」など、より具体的、実践的であった。

また、精神医学的な知識を挙げた者のすべてが精神科に勤務しているわけではなく、学校現場などに勤務している者においても、これを挙げている。

3) 修了後、大学院に望む支援

修了後に大学院に望む支援について回答を求めたところ、MC、PM とも100%が何らかの支援を希望していることがわかった (Table 6 参照)。ただし、期待する支援の差は顕著であり、MC 「困った時に何となく集まれる場」「困った時にサポートが欲しいので」と困った時の「駆け込み寺」として修了後の大学院に漠然とした期待を寄せているのに対して、PM ではそのような回答はなく、「〇〇を習得するための場」など具体的であった。

また、MC の中には「修了後も当然、大学院で援助が受けられる」という回答があったのに対し、PM ではそのような回答は皆無で、認識に差がある。

Table 3 大学院時代に行なったことで役に立ったと思うこと

	M 1	M 2	PM
実 習	3	9	10
講 義	10	5	7
ミニ・カウンセリング	3	3	4
心理査定実習	3	2	2
その他	4		2
人間関係	2	6	2
全 て	2	2	

Table 4 内部実習に関する M2 の評価

早くケースが持てたのが良かった	6
スーパー・ビジョンが良かった	4
受付実習が良かった	4
すべて良かった	2

Table 5 大学院時代にやっておけばよかったこと

	M 1	M 2	PM
知識を身につける	6	6	12
基礎知識全般	4	4	4
精神科的知識			4
査定・見立ての知識	2	2	4
方法論			4
実習・ケース担当	2	2	3
研 究	1	1	

Table 6 修了後、大学院に希望すること

	M 1	M 2	PM
スーパー・ビジョン	5		2
継続勉強会・研修会	3	4	8
就職情報の提供		3	
何となく集まれる場	5	6	

3. 修了後教育 (PMに対する調査)

修了生に対して、修了後の研修機会について質問したところ、職場で継続教育を受ける機会がある者が80%以上を占めた (Table 7 参照)。具体的には、職場のケース・カンファレンス、先輩臨床心理士からの指導等であった。しかし、職場で継続教育を受ける機会があると答えた者のうち90%が、資格の更新上ではなく実務上の理由から外部機関の教育を受けていると答えた。また、職場で継続教育を受ける機会がないと答えた10%においても、そのすべての者が、「まだ見つからないが、現在、継続教育を受ける場所を探している最中である」と答えていた。外部に教育機会を求める主な理由は、業務を行う上で内部研修のみでは十分ではないからという答えが圧倒的に多かった。

また、教育機会を得る上で最も問題となるのは、「スーパーバイザーが見つからない」「教育研修会が見つからない」であり、およそ80%の者がそう答えている。次に多かったのは「教育研修料金の高さ」で20%の者がこれを挙げていた。

Table 7 修了後の教育研修状況

		職場外で教育研修・S.Vを受ける機会がある		
		ある	なし	計
職場内で教育研修・S.Vを受ける機会がある	ある	13	1	14
	なし	2	1	3
	計	15	2	17

IV. 考察

1. 現在の悩み・困っていること

大学院生及び修了生の困難や悩みの大部分を占めるのが「力量不足」であることは、大学院での教育や体験のみでは業務をこなす上で十分な技量が身につけていないことを示すが、これは当然のことであろう。大学院を修了したからといって、また、臨床心理士の資格が取れたからといって、

すぐに心理援助職として機能する十分な能力が備わるわけではない。これは他の心理援助職と同様である。田畑ら (2006) も、乳幼児期から老年期に至る幅広い発達段階のクライアントを心理的に援助し、アプローチの方法も多様であり、また他職種と連携も必要とされる心理援助職の技能を2年間の大学院教育で修得するのは困難である点を指摘する。

しかし、その悩みは実務経験を行なうことによって質的に変化していることが本結果から窺われた。MC 1 では「自分の性格や適性に関する悩み」、それに伴う「漠然とした不安」、また、「就職・進路に関する悩み」など、「自分自身に対する悩み」がほとんどであった。それに対して、MC 2、修了生となるに従い、悩みの内容が「自分以外」になっている。内部実習や外部実習など臨床現場においてクライアントと関わりあう体験を通して、また、修了後は責任を自らが引き受ける心理援助職として現場で機能することを通じて、悩みの対象が「自分」から「他者」に移行することが窺われる。

心理援助職を選択する者の中には、自分自身の問題の解決を求めて大学院入学する者もある。また、無自覚ではあっても職業選択に当たっては自らのコンプレックスや個人的事情が幾分か含まれることもあろう。しかし、出発点は自らの問題であったとしても、臨床心理援助の場に身を置くことによって、少しずつ自らではなく他者を援助することに悩むようになることは、個人の成長といってもよいかもしれない。また、修了生の悩みがより具体的な心理援助業務内容と直結していることから考えても、臨床現場に身を置いてみてはじめて、自分自身の援助職としての能力の「不足点」が明確になるということは考えられる。

2. 大学院教育について

大学院教育の中で最も役に立ったと思うこととして「実習」「実習的な要素を含んだ講義」が挙

げられていることから、教育を受ける側はより実践的な学習が臨床心理士育成のために役に立つと受け留めていることが推測される。

しかし、その一方で、大学院時代にやっておけばよかったこととしての第一が「知識を身につける」であったことを考えると、体験型の学習が講義型の学習と比較して特に臨床心理士育成に優れているというわけではないことが推測される。そこには、両者の浸透度の違いが考えられよう。すなわち、大学院生や修士生が役に立ったと答えたものが「実習」であることから、実際に体を動かす、臨床現場の模擬体験ができる体験型の学習が臨床心理教育を受ける者にとっては馴染みやすく、習得しやすいということを意味する。臨床業務を「やっていけるような気になる」、自信に繋がるという言い方もできるかもしれない。しかし、大学院でやっておけばよかったことに「知識の習得」があるということは、知識の習得は必要ではあるがまだ十分ではないと彼らが認識していることを指し、知識は持っていれば役に立つが、現状では役に立ったと思うほどにはまだ定着していないということを意味する。講義など知識習得の機会が十分あったにもかかわらず、学生にとっては浸透が遅いということを考える時、その浸透を促すものとして、実際の業務（実習）が必要となることが推測される。知識は、実務を遂行する中でつまずいて、初めてその大切さに気がつき習得がなされるという類のものなのかもしれない。あるいは、若手臨床心理士や学生においては、頭ではわかっていることが、実際には使えないという事態が生じ、知識が実際の行動に活かされる域までには至っていないのかもしれない。一般に、臨床経験年数が高まるほどに、臨床心理以外の知識、認知・知覚・発達など基礎心理的な知識、脳科学に関する知識、社会資源に関する知識などが必要であるという者は多い。

また、知識の習得については、大学院生と現職者で必要とされる知識の内容は異なっており、学

生が漠然と知識全般なのに対して、現職者はより具体的かつ実践的である。これは経験を積むに従って目的がより明確になっていくことを示す。

また、現職者の中で必要な知識として「精神医学的な知識」を挙げた者の全てが精神科に勤務しているわけではなく、学校現場などに勤務している者も多く含まれていた。データ数が十分とは言えないため明言はできないが、ここから、臨床領域の違いにおいて必要とされる習得に偏りがあるわけではないことが言える。すなわち、教育現場での臨床を行なう者でも精神医学的知識を必要としており、逆もまた然りであることが推測され、どの分野で仕事を行うとしても一分野だけの知識ではなく、幅広い知識の取得が必要になるといえよう。

3. 修了後教育

修了生の8割に、職場で継続教育を受ける機会があることから、一見、修了後の教育が整っている印象を受ける。しかし、その内容を見ると「月1回、外部講師を招いての2時間のケース・カンファレンス（教育相談所勤務）」「先輩の臨床心理士に時間のある時に質問する（病院勤務）」「困ったことがある時には、医者に聞ける時は聞く（病院勤務）」など、教育機会は皆無ではないが、時間的に十分ではなく、また、定期的かつ継続的に指導を受けることは難しい場合が多いようであった。これは、職場内部に教育機会があると回答した9割の者が外部の教育研修を受けに行っているというより、資格更新のためというよりは業務遂行のためと答えていることとも関連する。

外部機関に教育機会を求める上で最も問題となるのは、「スーパーバイザーが見つからない」「継続教育研修会が見つからない」であり、この2つで80%を占めていた。ここからも、修了者、すなわち新人臨床心理士が求めている教育研修の形は継続的・定期的なもので、自らが業務を行う上で

困難に陥った時に頼れる場であることが考えられる。特に多くの者が個人スーパービジョンを受けたいと考えているが、しかし、個人スーパービジョンは受ける機会も少なく、また、高額であることがその希望の実現を妨げているようであった。指導を受ける者の需要に対して、供給が釣り合っていない現状が考えられる。

また、「教育研修料金の高さ」も修了後の研修を考える時の悩みとして20%の者が挙げている。修了者のおよそ80%以上が非常勤であり、収入が安定しない状況では、個人あるいはグループでのスーパービジョンは求めるが、継続的に教育研修費を払うのが難しい状況が示されていた。

修了生のおよそ100%が修了後も大学院に何らかの支援を求めているという結果は、上述の、十分な教育研修を受けたいが教育を受けられる外部機関が見つからず、また、金額的にも厳しいという事情を反映していることかもしれない。

しかし、その一方で、同じく大学院生も大学院側に修了後の支援を希望しているが、その理由は、具体的支援を求める修了生とは異なり、「何となく集まれる場」「困ったときにサポートが欲しい」と漠然とした理由からであった。困っている内容も、また、支援も、現場に出ている者と未だ出ていない者とは差があることが推測される。

また、MCの中には「修了後も当然、無料で大学院において援助が受けられる」という回答があったのに対し、PMではそのような回答は皆無であった。むしろ「大学院をお願いをしたいけれども、先生たちもお忙しいと思うので……」と大学院側を配慮する回答が認められた。これらを併せて考えると、現場で臨床業務を行なうことにより、臨床心理業務に対するの困り方がより具体的で重みを増したものとなっていき、また、それを周囲に「丸投げ」するのではなく、自力で何とかしようとする視点、周囲に配慮しつつ自らの仕事を行なおうとする視点に加わっていくことが推測される。

V. まとめ

大学院生から修了生になるに従い、悩みの質も対処もより明確で具体的になっていく傾向がある。ただし、問題意識が明確となり、勉強意識が高まった時期には、時間的、機会的、また、経済的に必要な支援を得るのが困難になる傾向が現状から窺われた。支援を母校である大学院に求めたいが、大学院側の状況も配慮してか、なかなか頼みにくいと考える者は多いようである。現場に出たからこそ問題意識も明確になり、勉強意欲も高まる部分も大いにあるが、大学院在学中の、より早期から、実務に向けた問題意識を学生が持てるような支援していくことも必要と思われた。

また、修了生に対して大学院側にできることは限られているが、必要な時期に行われる支援が最も効果的であることから、今後様々な形で修了後研修の方策を考えていく必要がある。

付記

本研究は日本心理臨床学会第27回大会で発表した内容に加筆修正を加えたものである。

引用文献

- 藤原勝紀 2002 臨床心理士養成に関する実践研究課題の焦点 京都大学大学院教育科学附属臨床教育実践研究センター紀要, 6, 29-40.
- 藤原勝紀 2003 臨床心理士養成大学院の教育研究体制と臨床実践指導研究分野の新しい展開 京都大学大学院教育科学附属臨床教育実践研究センター紀要, 7, 27-36.
- 深津千賀子・伊藤俊明・乾吉佑・羽下大信 2001 これからの臨床心理実習：現状と課題 心理臨床学研究, 19, 47-65.
- 畠瀬稔・小林剛・白石大介 1999 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科におけるカウンセラー養成・研修システムの構築 臨床教育学研究, 5, 65-85.
- 井上忠典・勝倉孝治 ミニ・カウンセリングを用いた臨床心理実習についての検討 東京成徳大学臨床心

- 理学研究, 8, 11-20.
- 金沢吉展 2002 臨床心理学における心理療法教育の目標、方法、および今後の課題 精神療法, 28, 4, 14-22.
- 神田橋條治 1997 対話精神療法の初心者への手引き
花クリニック神田橋研究会
- 唐澤俊英・唐澤孝子・池田祐二・長野佳子・小林悦子・加藤征彦・安芸幸生 2005 イニシアティブゲーム体験や動作・五感の観察を導入したA大学のスクリーニング「臨床心理学実習」の試み 大学体育研究 27, 31-34
- 葛西真紀子 2000 カウンセラーの反応と柔軟性の変化 — プラクティカムを通してのカウンセラー養成訓練の試み — 鳴門教育大学研究紀要(教育科学編), 15, 45-53.
- 松田純・浜渦辰二・田畑治・藤本亮・正木祐史・早矢仕彩子・磯田雄二郎・田辺肇・橋本剛・渡部敦子・南山浩二・星野和美 2006 心理臨床家の教育における倫理的、法学的課題 — 大学院教育及び生涯教育に関する検討 — 静岡大学人文学部人文学科研究報告, 56(1), A1-A22.
- 松原由枝 2004 臨床心理学実習が学生に及ぼした成長要因 川村学園女子大学研究紀要, 15(1), 43-54.
- 田畑治・近藤千加子・佐部利真吾・高木希代美・石牧良浩・辻貴文・池田豊應・江口昇勇・生越達美・酒井亮爾・杉下守男・鈴木金彌 2006a 修士修了直後、ならびに臨床心理士資格取得後の研修、スーパービジョン等についての追跡的研究(2) 愛知学院大学心身科学部紀要, 2, 19-28.
- 田畑治・近藤千加子・佐部利真吾・高木希代美・石牧良浩・辻貴文・池田豊應・江口昇勇・生越達美・酒井亮爾・杉下守男・鈴木金彌 2006b 修士修了直後、ならびに臨床心理士資格取得後の研修、スーパービジョン等についての追跡的研究(3) 愛知学院大学心身科学部紀要, 2, 15-26.
- 山田俊介 2007 カウンセリングの基礎学習としてのロールプレイに関する一考察 香川大学教育実践総合研究, 14, 71-79.

A study of trainings for clinical psychologist on graduate school
— Based on questionnaires for graduate students
and post-master's course —

Sanae AOKI

(Tokyo Seitoku University)

ABSTRACT

The purpose of this study to investigate training and education for clinical psychologist, that graduate students and post-master's course need to acquire, in order to work out more effective training programs for clinical psychologist on the graduate course.

Subjects were 25 graduate students and 17 post-master's course who acquired certified clinical psychologist license for these last few years. They were asked to evaluate their attitudes toward trainings for clinical psychologist and to estimate graduate education programs and trainings they had taken on master's course by questionnaires.

In the results, both graduate students and post-master's course showed that practical programs were more useful. But post-master's course made much of lecture. Post-master's course showed a strong will to study and training. And their attitudes to clinical problems were clearer and more practical than graduate students. But though they desire to get chance of study, they don't have enough to time and money for doing that.

It is hoped that Graduate school will give chance of education to students at better timing.

KEYWORDS: Clinical psychologist, Graduate student, Education